

戦前台湾における現地人布教師の養成

現地人布教師の養成

日本で生まれた天理教の教えが、日本の統治下とはいえ異文化社会である戦前の台湾で広まり、多くの信者を獲得するためには、現地の人々の文化に根ざした布教体制が整えられることは不可欠となる。その中でも、現地人布教師の養成はその後の天理教の発展に大きな影響をもたらすこととなる。

日本から台湾へ渡り布教を行った人々によって、多くの場合は病気の平癒という不思議なすけを通じて天理教の教えが現地の人々に広まる。そして現地の人々がそのたすけられた恩に報おうと、熱心に天理教の教えを学び、自らもおたすけ人として、今後は人をたすける立場へと成長していく。これが、台湾で天理教が発展していく循環モデルとなる。このような現地人信者の人材養成が、戦前の台湾においてどのように行われたかについてふりかえりたい。

おちばがえりと授訓(さづけの理拝戴)

多くの場合、病気平癒という形で、親神の存在と不思議なはたらきを知ることで、入信を決意した現地人信者は、まずそれぞれが導かれた教会のもとで信者として養成されることになる。主に教会において教会長やその家族、信者同志で天理教の教えについて理解を深め、毎日教会に参拝する日参や教会の月次祭への参拝、朝夕のおつとめの実行、ひのきしんの活動や、においがけの実践がなされることとなる。また、たすけていただいたお礼として教会へのお供えを続けるようになる。このように信者としての意識を高め、人にたすけられる立場から人をたすける立場へと成長していくためには、おちばがえりを行い、授訓、つまりさづけの理の拝戴が重要となる。

そこで、台湾の各教会はおちばがえりの団参を計画し、現地信者を率いて日本内地にあるおちばへ足を運ぶこととなる。当時台湾からおちばがえりをするためには、現在よりも多くの費用と日数がかかり、決して容易なことではなかった。しかし、そのように容易ではないおちばがえりをするのが、おちばがえりができる感動を一層大きなものにしたと考えられる。これまで話で聞いていたにすぎなかっただけに、親神が鎮まり、人類が創造され、世界たすけの根本としてかぐらづとめがつとめられるちばとそれを囲む神殿に足を運ぶことができた台湾の信者の喜びは想像に難くない。

さて、せっかくおちばに足を運ぶことができた人々が、特に病気をたすけるために拝戴できるのがさづけの理である。このさづけの理は、天理教の布教師が病気に苦しむ人々に直接取り次ぐことによって親神によるたすけ(この場合は病気平癒)を顕現させるものである。

さづけの理は、おちばでのみ設けられている「別席」で9回天理教の教えの話聞くことで、回を重ねるなかで心が生まれ変わり、親神の思いが心に治まることで拝戴できる。さづけの理を拝戴することで、現地人布教師としてさらに活発に布教活動を行うことができるようになる。このさづけは台湾で布教を展開する上で重要な役割を果たしたと言える。というのも、台湾には、漢人の民間信仰における「取驚」(台湾語)と呼ばれる呪術的な病気平癒の儀礼が広く受け入れられる文化的素地があるからだ。

天理教校別科入学

天理教校別科は天理教校の組織変更に伴って明治41(1908)年3月に天理教教師養成機関として本科と共に設置され、本科は1カ年、別科は6カ月だった。天理教校別科は天理教の布教を担う人材養成機関で、おちばで6カ月間共同生活を行い、天理教の教義を学び、おつとめの修練などを通して天理教教師を養成した。とくに台湾で活発に布教活動をするようになった現地人布教師は別科の卒業生で、多くの信者を導くなかで布教所長などの立場に立ち、リーダー的役割を担うこととなった。ちなみに、天理教別科は昭和16(1941)年に改編され、さづけの理を拝戴するための教育機関として修養科が生まれた。修養科の期間は3カ月で、この間に9回別席を運ぶことで卒業とともにさづけの理を拝戴することができる。この制度は現在に続いている。

天理中学校への内地留学

戦前は台湾が日本統治下であったため、公用語は日本語、統治機構も日本人中心であった。したがって、台湾人が内地へ留学することは、日本語能力を高め、学歴を得ることで台湾で社会的に高い地位を担う方法であった。さらに、天理教はおちばでの伏せ込みを重視することから、台湾人信者やその子弟をおちばにある学校に留学させるということも広く見られるようになった。たとえば、台湾中南部の農村出身者が内地留学として天理中学校で学び、後に地方官吏になったり、雑貨店などを営むようになり、戦後も引き続き教会をいろいろな方面から支えたという事例もある。特に中学時代の時期を日本人と共におちばの学校で過ごした経験と育まれた友情は、民族の違いを超え、統治する側・される側という単純な二項対立の関係をも超えた、人間としてのかけがえのない絆を醸成し、戦後も天理教における内地人と台湾の人々との交流は続いていくこととなった。

天理教台湾講習所開設

最後に、昭和17(1942)年に台湾伝道庁に開設した台湾講習所について紹介したい。長年外地における布教師養成が懸案となっていたが、天理教校台湾講習所として満州講習所とともに設置された。台湾伝道庁内に講習所の施設が建設され、所長には当時庁長の上原繁雄が就任した。この講習所は現地人教師の養成を目的とするもので、修養期間は6カ月、第1期は10名を收容し、次第に拡充を図ることになっていた。当時台湾には36カ所の教会があり、より一層現地人伝道に邁進しようとしており、現地人の布教師養成は大きな成果をもたらすものと考えられた。ところが終戦により、昭和20(1945)年に開講から4年で閉鎖を余儀なくされた。台湾講習所の卒業生は62名を数えた(内地人と現地人との内訳は不明)。

ちなみに、朝鮮講習所は大正8(1919)年に天理教朝鮮布教管理所内に開設された天理教朝鮮教義講習所が前身であり、昭和4(1929)年からは入所者を朝鮮人に限定した。昭和10(1935)年に天理教校に編入され、天理教校朝鮮講習所と改名した。50期まで行われ1,023名が卒業、2期まで行われた専科の卒業生も合わせると、1,245名が卒業している。

[参考文献]

上村福太郎(1976)『潮の如く』(下)、天理教道友社。
天理教校(2000)『天理教校百年史』天理教校。